

氏名 八 杉 佳 穂

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大乙第3号

学位授与の日付 平成6年3月30日

学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学位論文題目 An Areal-Typological Study of Middle American
Indian Languages

論文審査委員 主 査 教 授 嶋 山 理

教 授 黒 田 悦 子

教 授 友 枝 啓 泰

助教授 長 野 泰 彦

教 授 宮 岡 伯 人（北海道大学）

教 授 角 田 太 作（筑波大学）

論文内容の要旨

中米には90あまりの言語があり、話者は800万人ほどを数える。本論は、その中米の諸言語の特徴を類型地理論的に考察し、あわせて、言語普遍論や、さらには中米の歴史や文化の研究への貢献をはかろうとしたものである。中米諸語の利用できる資料を活用して、音韻論、形態論、統語論の3つの分野から、それぞれ、音韻目録、数詞、7つの語順を比較の対象に選び、検討を行なうと伴に、人称接辞を利用して、新しい類型論を展開した。

本論の対象となる中米諸語の分類を提示したあと、第2章では、中米諸語の音韻をとりあげ、類型地理論的な観点から比較することにした。各言語に対して提案されている音韻体系を比較しやすいよう表記法を統一した233の資料のうち、独自の判断に基づき比較的信頼度の低いものを除いた174を比較の対象とした。まず子音と母音に分け、子音については、閉鎖音、摩擦音、流音、鼻音、わたり音の5つの下位類に分けて論じた。母音は音質の違いに基礎におき、鼻母音、長母音、さらには声調の有無を利用し、類型論的な考察を行なった。次に、中米諸語の音韻的な地域特徴を探るため、2つの観点から、すなわち、珍しい音素があるかどうかということと、一般的にみられるたとえば/p/のような音素が欠けているかどうかということを利用して、地域的な特徴を考察した。本研究は中米という限られた地域の音韻の類型論的な比較研究であるため、それだけを利用して言語普遍論へ貢献しようとしても不可能である。そこでこれまで提案されてきたうち、子音については主にNartey[1979]、Maddieson[1984]を、母音についてはCrothers[1978]を利用して、考察を行なった。中米諸語は変化に富んでいるが、それでも共通する音素をもとに、中米諸語の中核となる音素を取り出すことが可能であった。

これに対し、第3章、第4章で扱う、数詞や語順の類型論は、音韻体系と同じように共時的なものであるが、音韻体系とは異なり、構成法や組み合わせの差から時代的な関係を推測することが可能な分野である。

第3章では、形態論として、数詞を扱った。数体系は一つの原理によるものではなく、たとえば五進法的な数え方のうえに十進法、二十進法的な数え方が混じった体系となっている。中米の数体系の原理をまとめると、基本数(係数)×基底数+基本数($U \times B + U$)が圧倒的である。数詞の構成法は、10までは五進法と十進法の2つがあった。しかし4や8、9において倍数法や逆進法をつかう言語も若干ながらみられた。10から20までは、10を基底にする構成法が一般的であるが、 $U+B$ と $B+U$ の順序の違いがみられた。マヤ諸語では圧倒的に $U+B$ であるが、ワステク語は同源の語彙を取りながら $B+U$ という順であった。これはそれと同じ順序の構成法をとるトトナク語やオトミ語の影響と考えられた。また、たとえば、10から19までを五進法的に数える珍しい構成法は南オトマング諸語にみられるように、数の構成法の違いは、地域的に固まってみられた。20以上はほとんどが二十進法であるが、上位起算法と下位起算法の違いがみられた。上位起算法はマヤ地域に固まっており、これまた地域的なまとまりがみられた。

こうした地域的にまとまった特徴は、語彙にではなく、構成原理にみられた。そのもっとも典型的な例はカクチケル語にみることができる。古典カクチケル語と現代カクチケル語はほぼ同じ語彙を用いながら、構成法を上位起算法から下位起算法にかえており、それは80を表わす語彙を61から80までに使うか、80から99までに使うかというところに見事に

あらわれていた。構成原理だけを借りるということは、数体系に特有の現象ではなく、語順にもみられる。

第4章では、その語順の類型論を扱うため、7つの語順を選んだ。中米には類型論では珍しいとされてきたVSO（動詞－主語－目的語）/Po（後置詞）言語やVOS言語があった。前者はSOV/Po言語からの変化と考えられた。中米に中核部は、メソアメリカという文化領域として知られている。類型論的にいうと、メソアメリカは北と南のSOVという動詞後置の言語に囲まれた地域とみることが可能である。メソアメリカの中心部にあるオトマンゲ語族の大多数は、NA（名詞－形容詞）、NP（名詞－所有詞）、ND（名詞－指示詞）で、その他の言語はほぼAN、PN、DNと逆の語順になっており、付加部－主要部という言語と、主要部－付加部という言語のぶつかりあいがあったとみられる。P/NとD/Nの語順では、オトマンゲは劣勢にある。しかしA/Nの語順では、ナワ語群の多くをANからNAにかえつつある。それは交渉の深さに関係するようで、周辺の北プエブラナワトル語やワステカナワトル語にまでは及んでいない。このANからNA化は、GN（属格名詞－名詞）のNG化と関係している。それは、古典ナワトル語では、GNとNG、ANとNAの共存がみられるし、コラ語でも、GNとNGの共存があり、ウィチョル語では、GNにもかかわらず、NAとなっているからである。これとよく似た現象が、やはり後置詞言語であったと思われるミヘソケ語族の一部にもみられる。その多くはGN、ANであるが、いくらかの言語ではGNとNG、ANとNAの共存がみられる。これらは変化の中途の段階を示しているとみなすことが可能である。Po/Pr（前置詞）の語順でメソアメリカをみると、北から侵入してきたナワ語群と、おそらく古くから現在地にあったとみられているミヘソケ語群がPoで、その他はPr言語である。Pr言語が優勢であり、Po言語は、Prももつようになったとみることができる。

語順の類型の比較により、言語の変化のいくつかが推定できたが、これを考古学や歴史文書の資料とあわせて考えると、一層興味深い洞察が得られる。たとえば、古典ナワトル語ではGNとNG、ANとNAの共存がみられるのに対し、現在のナワ諸語のほとんどはNG-NAになっている現象を、GN-ANからNG-NAへの変化とみたが、古典ナワトル語を話していたアステカ族が14世紀頃メキシコ中央高原に移動してきたという資料と合せてみると、14世紀から16世紀の間に、GN/NG、AN/NAの共存が起り、以降NG-NAにかわっていったとみることが可能である。

第5章では、前章までの中米諸語を類型地理論的に考察する方法とは逆に、中米諸語から類型論への貢献を試みたもので、文核（動詞句）内で主語や目的語をあらわす人称接辞（接語）を利用して、A（他動主語）、O（他動目的語）、S（自動主語）、G（所有人称）の関係を考察した。四角形内に配列したA S O Gから次のような新しい含意法則が導かれた。AとOは本来別扱いを受けるが、両者が同じ場合、SまたはGもA Oと同じになるか、S Gともに同じになる。同様に、SとGは本来異なるが、両者が同じ場合、AまたはOがS Gと同じか、A Oともに同じである。人称接辞をもとにA O S Gの関係を考察したが、A O S Gを表わす格などにもこれは応用可能である。

類型論が単なる類型の研究ばかりでなく、言語の分類や言語の変化の推定にも役立つこと、さらには、メソアメリカの歴史の解明にも役立つことなどを最後にまとめた。

論文の審査結果の要旨

本論考は中米で話される100程度の言語を地域類型論的に見直す試みで、従前この種の業績は皆無に近く、中米諸語というひとつの大きな言語世界に関してなされたデータの集大成と整理という点で、今後の言語類型論やこの地域の民族学的記述研究の基礎となる貴重な業績と見做すことができる。本論考の方法論は、類型を言語の系統関係プロパーに直結させず、限定された時間的拡がりの中での諸言語の相関関係を扱う慎重な姿勢を矜持している。

第一部では、音素目録を扱う。これらの資料は、二つの八杉自身による1次的記述資料を除くと、2次資料が多いが、記述の粗密に大きなばらつきのある原資料に対して、一定の音表記上の整理・統一（一部では音韻再解釈）を行なっていることにより、今後の民族学的記述研究や言語類型論の見通しをつけるうえでの重要な基礎資料となると考えられる。

第二部では数の体系が論じられる。その構成方法の地域的偏りの特徴を抽出し、それが歴史的文化的接触と呼応することを指摘した。そして数体系の原理は「係数 x 基底 + 基本数」が圧倒的であり、とくに、数詞20以上はほとんどが二十進法を取ることで、その二十進法には上位起算法と下位起算法があるが、低地マヤ諸語には上位起算法が集中することを明らかにした。歴史的に見ると、古典カクチケル語の上位起算法が高地マヤ諸語の現代カクチケル語で語彙は維持されながらも下位起算法へと変化する。八杉は、それが高地マヤ諸語のママ語の構成原理を言語接触によって借用したためであると推論する。さらに、ママ語が語順変化においても革新の源となっていることも証明された。

第三部では語順が論じられる。従来余りよく知られていなかった言語群の語順を整理して示しており、資料的価値が高い。具体的には、7項目に基づく複合的分類法が提示された。マヤ諸語ではVOSという、従来の類型論では知られていない語順がドミナントであるが、一部でVSO地域が見いだされる。八杉はこれがママ語との接触によることを明らかにした。また、VSO-後置詞、OSVの存在を指摘した点は高く評価される。現代の言語類型論で広く受け入れられているJ. グリーンバーグの類型論に対抗しうる証拠を提示しているからである。これらの分析の根拠は主として文を構成する見かけ上の構造であるが、さらに、将来の問題として、文核内部の構造も全体的な比較において精査すべきであろう。

第四部では格標示のありかたが論じられる。動作者 (Agent), 受動者 (Patient), 自動詞文の主語 (Subject) に属格 (Genitive) を加えた組み合わせりかたの類型を示す。能格現象にGenitive標示が深くかかわっていることはよく知られているが、多くは専ら形態論的視点に限られていた。分析の項としてGenitiveを考慮に入れるとなぜ構造をすっきり説明できるのかは今後の課題であるが、類型と地理的偏在を浮かび上がらせるというよりはむしろ、能格構造を解釈するひとつの見方を発見したことが独創的であると評価される。

以上のことから、本論文は学位を授与するに適當であると認められる。